1998.06.23　毎日新聞

電機業界 ソフトの時代へ

小松電機産業社長 小松　昭夫さん

1973年に島根県八雲村で創業。社の合言葉は「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」。85年にセンサーで人や物を感知して、自動的に開閉する高速シートシャッター（シート地のシャッター）「門番」を開発し、これを機に全国展開。東京にも支社を置いて事業を拡大し、シートシャッターの省エネや防じん、食品衛生などのメリットを生かして全国の工場や倉庫などに導入されている。さらに上下水道制御・監視システムなども開発。小松社長は「従業員が自由かつ達に、仕事ができる環境を作ることに気を配っています」と話す。従業員86人。資本金１億円。年商約42億円。

島根県八雲村から、北に宍道湖を望む松江市乃木福富町の「松江湖南テクノパーク」にこのほど新社屋を移設した電機機器製造メーカー、小松電機産業は「シャッター」に着目してニュービジネスを成立させた。従来は主に防犯目的だった金属性のシャッターを、軽い抗菌シート地で自動開閉する「シートシャッター」に変身させたことから、工場などの産業用に急成長。現在、この分野では全国シェアの60％を占める。また、新社屋移設の記念事業として、中国の26の大学と多くの専門家らが編さんした歴史資料「伝世蔵書」を購入するなどユニークな試みも目立つ。小松昭夫社長(54)に、こうした企業理念を聞いた。【梶川　誠】

――新社屋は宍道湖のすぐほとりですが、水辺を選ばれた理由は。

私の10年前からの構想を具現化する第一歩の土地。物事は人の思いが確立して、道筋が見えてくる。そういう場所はどこかと探していたとき、市が造成中のこの土地を知り、新社屋を建てました。昔、ロサンゼルスは砂漠だった土地にダムを建設して湖を作り、そこから発展した都市だと聞いたことがある。人の創造力、構想力、バランス感覚を養うのには水辺は不可欠で、湖のほとりが一番適していると思います。そういう理由でこの土地を選びました。

――アジアの中でも特に中国との友好に力を入れているようですが。

4、5年前に韓国を訪れた時、日本と韓国、中国の歴史について、今の我々が何をしなければならないか深く考えた。情報化、交通機関の発達で国境は低くなっている。日本とのあつれきの解消、信頼関係の再構築など、子孫に対してやらなければならないことは多いと思います。

――中国の歴史資料である「伝世蔵書」を購入したいきさつは。

「伝世蔵書」は中国政府や企業グループ、専門家らが約6年かけてまとめた歴史書です。従来、日本には国立国会図書館と東大図書館の二つしかなく、わが社も記念事業の一つとして購入し、島根大に寄贈しました。翻訳は島大の学生やOB、地域の人や留学生に依頼しています。翻訳が終われば島大も広く一般に公開してくれるそうです。こうした作業を通じて、日中友好に少しでも役立てばうれしく思います。

――これからの電機業界をどう見ますか。

これまで、電機業界はハード中心でしたが、これからソフト中心の時代。自動車、生命保険、金融機関など世界的に再編成の機運が高まっている。特に日本は金融システムの面では世界にかなわない。電機業界でも世界的に再編成の影響を受けることになるでしょう。

――今後、目指す姿を教えてください。

企業のトップは、現状認識と将来展望を考えなければならない。どうすれば、会社、社会、地域、日本、アジアの人たちの役に立つか、そういう事業を起こすことができるかが求められている。今、日本は変革期です。こういう時は原点に戻ることです。原点には二つあり、一つは目に見える原点の「原理」、もう一つは心の中の原点の「心理」。この二つにさかのぼって物事を考えることです。

自分は事業家です。言ったことと、やったことを立証しなければ信用が得られない。人間の社会にはひずみがあります。その中で整合性を保たなければなりません。私が掲げている、貴重な汽水湖、中海を利用した「中海本庄工区の干拓地事業計画」、松江市を観光だけでなく、一般市民にも安心して暮らすことのできる都市にする「松江心の都構想」。これらの具現化のために、これからも活動していきます。